

竹内好の思想に学ぶ

——「在日」にとっての絶望、抵抗、敗北感の持続——

ユン
尹
コオンチャ
健次

(立命館大学コリア研究センター客員研究員)

私は、在日総合誌『抗路』七号（二〇二〇年七月）に載せた「在日」は「宙づり」だと言われるが」という文章で、「主体的であろうとすると、とりわけマイノリティ、周縁者の場合には、……絶望を直視することの中でこそ「希望」も見いだせるのではないか、という、格好よすぎるかも知れないが、……」と書いた。たぶんそうだろうと思いつつも、自信があってのことではないので、いくぶんか曖昧に書いたつもりである。精神の絶望を見つめることによって、それでも希望のありかを反証し、普遍性につながる道を探し求めようとしたのかも知れない。そして最後の結論めいた部分では、「（「在日」の）不安定さを支える思想というのは、窮極的には、じつはこの生死一如のリズムであり、そこには苦と楽、絶望と希望、邪と正、闇と光といった二項対立があるのではなく、その混在の中でもがき続ける自分自身があるのではないかと思う」と書いた。今でもあんなことを書いてよかったのかと疑問をもったりもするが、それでも生き方としては、そう表現するしかないのではと自己正当化したい気持ちである。

ここで、「絶望」という言葉は、哲学や思想、あるいはもっと日常的な意味での生き方などを論じるときにしばしば使われるもので、そう縁遠い、難しい言葉ではない。むしろ意味もよく分からないままに使う言葉である。その点、戦中・戦後を生きた日本の思想家・知識人である竹内好（よしみ）（一九一〇—一九七七年）が自分の思索の根底に、その「絶望」という言葉を据えていたことがいつも気になってきた。その真意が何かよくわからないままに、いつかそれを調べてみたいと思ってきたのである。竹内は日本のあり方に絶望しつつも、アジアと真摯に向きあい、アジアと日本のことを真剣に考えようとした希有の人物であるともいえ、私もこれまで自分の論著で何度か言及してきたことがある。竹内が「アジア」というとき、それは基本的には「中国」を指していたが、その「アジア＝中国」には朝鮮への視座もいちおう含まれていたとも考えられ、その意味もあって、ここでは、竹内にとっての朝鮮の位置づけを考察するとともに、その竹内の思想を学ぶことによって、「在日」のあり方を考えてみたいと思う。

抵抗の主体としてのアジア

戦後日本の思想史において竹内好は独自の位置を占めたが、その著作も膨大である。一九六六年に出版された『竹内好評論集』全三巻（筑摩書房）は、それぞれ『新編現代中国論』、『新編日本イデオロギイ』、『日本とアジア』と題され、戦後における竹内の批評活動を集約して収めている。中国文学研究者としての竹内は、戦前一九四四年に『魯迅』を出して一躍名を知られるが、竹内の著作全体はのちに『竹内好全集』全一七巻（筑摩書房、一九八〇—八二年）としてまとめられている。竹内を論じた著作としては

松本健一『竹内好論—革命と沈黙』（第三文明社、一九七五年）、菅孝行『竹内好論—亜細亜への反歌』（三一書房、一九七六年）をはじめ、孫歌『竹内好という問い』（岩波書店、二〇〇五年）、そして直近では黒川みどり・山田智『評伝 竹内好』（有志舎、二〇二〇年）など数十冊にのぼり、個別論文はそれぞれ数百篇以上と、数えるのも困難である。今回、竹内好を考えるにあたっては、竹内自身の著作と『評伝 竹内好』など何冊かの竹内論を読み込むのに注力するとともに、個別論文としては、平石直昭「竹内好における歴史像の転回—大東亜・魯迅・アジア」（二〇〇六年）、加藤周一「竹内好の批評装置」（二〇〇九年）、水谷仁「もうひとつのアジア—竹内好の朝鮮像」（二〇一六年）、姜海守「〈朝鮮〉というトポスからみた「方法としてのアジア」」（二〇一八年）を参照し、また竹内の「アジア主義の展望」やナショナリズム論を批判した梶村秀樹、および竹内の「方法としてのアジア」に疑義を呈した中野敏男、その他の論稿を主として参照した。

といっても、私は戦後日本の思想全体を論じる力もなく、竹内好の思想を専門に研究しているわけではない。竹内自身、肯定的に、あるいは否定的に、さまざまに評価されてきたが、やはり「不遇な思想家である」（菅孝行）という評価は免れないと言ってよい。ただ私は、「在日」の過去と現在、未来を考えるに際して竹内に学んでみたいというだけである。実際、私が二〇〇八年に出した『思想体験の交錯—日本・韓国・在日 一九四五年以後』（岩波書店）で書いた竹内に関する部分も断片的なものであり、何ら結論めいたことを書いているわけではない。ただ少なくとも、竹内については好意的な評価をしてきたのは確かであるが、それが「在日」にとってどんな意味合いを持つかについては何も書けなかった。

竹内好の思想展開の座標軸となっているのは他者としての中国近代の自己形成史である。それはあくまで「日本」のあり方を考えるための反照的な位置づけをもつが、竹内が中国文学を志したのは、まさに満州事変の一九三一年であり、その後上海事変、満州国宣言とつづく日本の大陸侵略が深まっていった時期である。その竹内の思考方法には、日本および中国の「民族」（ネーション、ナショナルティ）への絶えざるこだわりがあり、また普遍化・定型化されがちな西欧近代に対する中国の自己形成史と日本のあり方に対する異質性の認識ないしは疑念がある。つまり西欧近代のアジア支配にたいし、中国が一貫して抵抗の姿勢を示したのに対し、日本は当初は反発しようとしたとしても、結局、その後西欧近代のアジア支配と同じ道をたどって「大東亜」を掲げ、アジア＝中国を支配しようとしていった時代へのいらだちである。竹内の目からすると、中国が植民地支配をはねのけていく過程でナショナリズムと革命を結合させる民族抵抗の自己形成をなしとげていったのに対し、日本は戦前も戦後も、他民族との関係で自民族を把握することに失敗し、「民族を思考の通路に含まぬ」（竹内好）道を歩みつづけ、自民族（自国民）から変革への契機を奪いとったというのである。戦後日本の近代化（の「成功」という錯覚は、「進歩」の幻想のなかで抵抗の力、革命の力を失わせるものでしかなかったというのである。

中国文学研究の道に入った竹内好は、東京帝国大学支那文学科を卒業したあと、二十代後半に外務省の補助金を得て北京に留学する。帰国後の一九四一年一月二日に「対米英宣戦布告」、つまりアジア太平洋戦争の勃発に際して「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」を執筆する（雑誌『中国文学』）。中国と向きあう竹内の深い苦悩を踏まえたものではあったろうが、日中全面对決の侵略戦争という認識をもちながらも、「強者」である欧米帝国主義に対する「東亜」の「民族解放」の一環であると理解したことは否めない。鶴見俊輔はこの時の竹内の思想は「聖戦の思想」であり、宮崎滔天ら、明治以来の右翼思想の

血脈を受け継ぐ「右翼的アジア主義」の表明であったという。それは竹内の思想の誠実な表現ではあったが、「現実把握の弱さ」がもろに出たものであると言う（『竹内好 ある方法の伝記』岩波現代文庫、二〇一〇年）。こうして竹内は、相反する二重理解の葛藤・矛盾を深めつつ、戦争擁護・西欧的近代の超克を唱える「世界史の哲学」・京都学派に共感を示していった。竹内によれば、近代西欧がアジアに侵入し、古いアジアを解体させ、アジアに内発的な変革を起こさせたという歴史事実は否定できない。この場合、侵入者が進歩を独占していれば、抵抗は進歩否定の形をとってしまうが、それを果たして反動と言えるのかどうか（『竹内好全集』⑤、「アジアにおける進歩と反動」）と。つまり、抵抗の主体としてのアジアを考えると、西欧近代に真っ先に抵抗したのは日本であるが、その日本はやがてその歴史的役割を裏切り、帝国主義国家としてアジア大陸に侵入した。抵抗と侵略の二面性、それらを反動とくくってしまっているのかどうか、という根源的な懐疑である。

「絶望」と「ドレイ」

竹内好にとって一九四四年の『魯迅』刊行は大きな画期となった。竹内からすれば、中国近代の自己形成史は一九一九年の五・四運動から始まった。五・四運動は、第一次世界大戦に関わる一九一九年一月のパリ講和会議の結果に不満を抱いた中国民衆・学生の抗日・反帝国主義そして反封建主義の側面をもった大規模な蹶起であり、それは植民地下朝鮮の全民族的な反日独立運動であった同年の三・一独立運動の影響を受けたものでもあった。魯迅はこの五・四運動に連なる一九一〇年代のナショナリズム高揚の啓蒙運動・新文化運動のオピニオンリーダーのひとりであった。魯迅は、文学へと向かう回心の決定的な契機が死と生・絶望と希望・政治と文学の鋭い葛藤の中にある、竹内にとっては、転形期を生きる魂の全身的ありようを示してくれる近代中国を代表する文学者であり、革命家であった。しかし、魯迅が中国革命の現在進行形の道すじを闘いの相手としていたことと、竹内が「大東亜」の建設に期待を託した、いわゆる「日本イデオロギー」を闘いの相手としていたことの違いはすでに歴然としていた。松本健一は言う。「それは、絶望をすることのできた魯迅と、絶望さえもすることのできない竹内との違いである。魯迅は絶望をすることによって、その虚妄に思いを至し、それによって「将来にある」希望に、みずから預けることができた」。だが、日本イデオロギーを闘いの相手にした竹内は、「絶望さえもすることが許されなかった。それゆえ、「将来にある」希望にみずから預けることは、できようはずもなかった」（松本健一）。

竹内好自身の言葉で、魯迅が見た「絶望」が何であったかを確認しておきたい。「魯迅の見たものは暗黒である。だが、彼は、満腔の熱情を持って暗黒を見た。そして絶望した。絶望だけが、彼にとって真実であった。しかし、やがて絶望も真実でなくなった。絶望も虚妄である。……絶望に絶望した人は、文学者になるより仕方ない。何ものにも頼らず、何者も自己の支えとしないことによって、すべてを我がものにしなければならぬ。……私が彼の回心と呼び、文学的正覚と呼ぶものが、影が光を生み出すようにして生み出されるのである。……魯迅の絶望したところに、多くの人は絶望しなかった。そのことによって、人々は衆愚となった」（『竹内好全集』①、『魯迅』「政治と文学」）。竹内もそのひとりであったのかも知れないが、『魯迅』を書いた頃、竹内は「大東亜」と日本を一体化して見ようとした。日本は、欧米

列強に対抗する東洋諸民族の先頭にたつ「大東亜共栄圏の盟主」であるとさえ位置づけていた。竹内は、中国と日本とを同質なものとして捉えようとしていたとち廻っていたと言ってよいのかも知れない。

しかし、魯迅に出会うことによって、竹内好は大きな転回点を見出ししていく。「魯迅が、私を感じているような恐怖に捨身に堪えているのを見た。というよりも、魯迅の抵抗から、私は自分の気持を理解する手がかりをえた。抵抗ということ私を考えるようになったのは、それからである。抵抗とは何かと問われたら、魯迅においてあるようなもの、と答えるしかない。そしてそれは日本には、ないか、少ないものである。そのことから私は、日本の近代と中国の近代を比較して考えるようになった」(『竹内好全集』④、「近代とは何か」一九四八年、旧題「中国の近代と日本の近代」)。事実、戦後になって、竹内にとって日本のはっきりと、「東洋」の外に置かれていく。平石直昭は、この日本=非東洋という竹内の戦後認識は、文化の型の違い、ひいては「解放」の理念の違いということに関わっているという。明治維新はたしかに革命であったが、しかしそれは同時に反革命でもあった。そこには竹内のいう、日本文化の無抵抗性、優秀性、転向性、ドレイ性などの特質があり、それらは魯迅が強調した「国民性の改革」という課題の指摘につながっていたという。「こうして回心と敗戦経験をへた竹内は、日本文化にドレイ的構造を見出し、その根本的な革命が必要だという認識をもって戦後出発した」(平石直昭)。

竹内好によれば、近代西欧の中国侵略の植民地状態にあって、魯迅はそのドレイ状態を拒否しながらも、それからの解放が不可能なことを見抜いていた。「ドレイが、ドレイであることを拒否し、同時に解放の幻想を拒否すること、自分がドレイであるという自覚を抱いてドレイであること、……それが魯迅においてある、そして魯迅そのものを成立せしめる、絶望の意味である。絶望は、道のない道を行く抵抗においてあらわれ、抵抗は絶望の行動化としてあらわれる」。それに対して日本は対蹠的である。「ドレイは、自分がドレイであるという意識を拒むものだ。……ドレイがドレイの主人になることは、ドレイの解放ではない。しかしドレイの主観においては、それが解放である。このことを日本文化にあてはめてみると、日本文化の性質がよくわかる」(『竹内好全集』④、「近代とは何か」)。日本は明治維新で近代革命に成功したというが、そこでの進歩の方向は、日本が西欧に抵抗を示さない、日本文化の構造的な性質と密接にからむものであった。「日本には、型といえるようなものがない。つまり抵抗がない。強いていえば型のないのが日本型である。個性のないのが日本の個性だ。……自由の味を知らぬものは、自由であるという暗示だけで満足する。ドレイは自分がドレイでないと思うことでドレイである」。まさにそれが「日本文化の優秀さ」に潜む問題だ(『竹内好全集』④、「近代とは何か」)、と。竹内が魯迅から学び取った抵抗という態度は、内へと向かう回心の動きであり、それはあくまで抵抗によってのみ媒介されるものであった。それに対し、「転向」は、抵抗のないところにおこる現象であると、釘を刺す。

竹内好はこうした魯迅をさして、「魯迅のような人間は、進歩の限界をもたぬヨーロッパの社会のなかからは出てこぬだろう。また、進歩の幻想のなかにいる日本でもうまれぬだろう」(『竹内好全集』④、「近代とは何か」)という。加藤周一はこのことに関連して、魯迅のような人間がヨーロッパや日本に出てくる可能性がないとすれば、魯迅のような人間をこれほど深く理解する人間も、ヨーロッパや日本に出てくることは難しだろうと評しつつ、「おそらく竹内好は、魯迅の条件を外側から理解することのできる極限まで、理解した人である」と断じる。ただ「そこから発する議論は、普遍的なものよりは、特殊なものを強調する傾向が強く、そのことと関連して、現状の批判には鋭く、将来の目標の内容については不

明確にならざるをえない」とも言う。言ってみれば、竹内の所説は「実に鋭い批評装置」ではあっても、普遍的な世界像を生み出し、それにもとづく問題解決の方法を導き出す「理論の体系」には至っていないことを示唆している（加藤周一）。

事実、竹内好は、「敗北は抵抗の結果である。抵抗によらない敗北はない。したがって、抵抗の持続は敗北感の持続である。……しかし、そうはいても、抵抗とは何かという問題は、私にはわかっていない。抵抗の意味をつきつめて考えていくことが、私にはできない。私は哲学的思索には慣れていない。そんなものは抵抗でも何でもない、といわれればそれまでである。私はただ、自分がそれにおいてあるものを感じているだけで、それを取り出して、論理的に組み立てることはできない」（『竹内好全集』④、「近代とは何か」と、自らの限界を認めている。考えて見れば、魯迅が没したのは一九三六年であり、それに対し、竹内は第二次大戦後の中国および日本の激動期をへた一九七七年まで生をまっとうする。実際、竹内が論じた中国自体、未完結性をもった生きた実体であり、予見不能のものであった。当然、鋭い批評を次々と発する竹内の内部では、少なからず、現実との乖離が自覚され、その分、現状への焦慮や危機感が深まりがちだったと言えよう。

竹内好の朝鮮認識

竹内好は現状に対しては鋭い分析をしながらも、実際の局面では積極的に動いたわけではない。それが竹内の自己嫌悪でもあったろうが、一九六〇年代初めの安保闘争の局面では活発な社会参与によって、一時期、この自己嫌悪が一瞬消えるときがあったのかも知れない。もとより思想のあり方を内在的にしきも分かりやすい形で捉えるのは困難であるが、一九五〇年代に入って左翼陣営の側から単独講和の問題とも関連して、「民族の問題」やナショナリズムの問題が出されてきたとき、竹内は、日本共産党の路線を中心に、戦後日本の思想のあり方に根本的な批判を加え、日本の進歩的史学者などの態度は、「外」なる権威には弱く、「内」なる民衆にたいする責任感は乏しいドレイ的な精神構造の表れであると批判した。日本人の精神構造そのものの変革が不可欠だとするもので、安易な民族やナショナリズムの主張は、ふたたびウルトラ・ナショナリズムに陥る危険性があるとするものであった。革命中国の民族抵抗史＝自己形成史を指標としながら近代主義・マルクス主義・日本共産党を「民族を思考の通路に含まぬもの」と批判したのである。

しかし、である。それでは竹内好が中国近代の自己形成史、とくに革命中国に共感を寄せたとしても、近代日本の最大の侵略ターゲットでありつづけた朝鮮にたいしてはどうだったのかという重要な問題がある。いわゆる竹内の朝鮮認識はどんなものであったかということにもなるが、少なくとも竹内の所説から見ると、朝鮮のもつ比重は小さなものでしかなかったと言わざるをえない。戦前・戦中期でいえば、竹内の朝鮮に関する記述は、一九三二年にかつての友人を訪ねて朝鮮に旅行したことについてのものだけだったと言ってよい（『竹内好全集』⑮、「鮮満旅行記」）。戦後は、一九五〇年の朝鮮戦争勃発と関連して少し文章を書くようになるが、歴史家の羽仁五郎や石母田正、藤間生大などがそれぞれ敗戦後、一九五〇年代にわたって、朝鮮そして在日朝鮮人に対する共感ないしは連帯の意をさまざま形で表し、それでも朝鮮民族に学ぶことに実践的な課題を見出そうとしていたこととは少なからぬ差がある（尹健

次)。

もちろん竹内好の膨大な著作を丹念に探索すれば、一九五〇年代以降、朝鮮ないし在日朝鮮人に関する文章が散見されるのは確かである。事実、近年になって、竹内が論じる中国には朝鮮への視座も含まれていたとする論が少なからず増えてきたようにも思われる。水谷仁「もうひとつのアジア—竹内好の朝鮮像」がその代表的なものであり、ついで姜海守「〈朝鮮〉というトポスからみた「方法としてのアジア」、そして黒川みどり・山田智『評伝 竹内好』をあげることができる。水谷は言う。既存の研究において、竹内のアジア認識は〈アジア=中国〉だと見なされてきた。朝鮮について竹内が叙述したものはそれほど多くなく、自身を含めた日本人がいかに朝鮮のことを知らなかったとも説いているため、竹内における朝鮮という問題が論じられること自体、これまでなかった(水谷仁)。

事実、竹内は、「朝鮮はいちばん近い外国だから、本当はいちばんよく知っていなければならないわけだが、……朝鮮の知識はほとんど皆無に近い」と自ら述べており、そこには「朝鮮を外国として眺めるのをためらう気持ちが日本人の心にぬきがたくひそんでいる」(『竹内好全集』⑤、「金達寿著『朝鮮』一九五八年)からだと述べている。それほどに朝鮮への視線が欠落していたとも言えるが、朝鮮語を学ぶことの必要を説いたのは、晩年とも言ってよい一九七〇年に「朝鮮語のすすめ」という文章においてであった。「私は余力があれば今からでも朝鮮語を習いたい。そして人にもすすめたい。……若い人には極力すすめたい。あなたがあなた自身になるために、朝鮮語がどんなに役立つかを力説したい」(『竹内好全集』⑤)と。「朝鮮映画「赤い花」を見て」や「隣人の責務—『金史良全集』を推す」を書いたのも、一九七〇年に入ってからのことであった。黒川みどり・山田智『評伝 竹内好』では、竹内がプロレタリア文学者の中野重治から少なからぬ影響を受け、一九六〇年代末に「差別を考える会」を組織するなど、「弱者」に寄り添う思考を育んでいったと、竹内の朝鮮認識についてやや過大に評価する姿勢を示しているようである。

日本の敗戦は、近代日本の歴史意識に深く刻み込まれた朝鮮像の根本的な転換を迫るはずであった。しかし、敗戦の衝撃はさしあたっては日本人の世界認識を内閉させ、しかも南北分断の進行が独立朝鮮への関心をも冷却させていくことになった。「未開」「野蛮」といった朝鮮イメージは払拭されないまま日本人の意識に潜在化し、朝鮮史研究の開拓はふるわず、朝鮮語の学習は警察・自衛隊の治安機関にまかせられたままであった。「韓国併合」といった植民地支配の事実も意識化されず、アジア侵略といえ一九三〇年代の中国侵略からと認識されがちであった。心ある知識人の朝鮮半島への関心も北朝鮮への過剰な思い入れが目立ち、分断下の韓国に対する関心は極度に低かった。そうした歴史の流れのなかで、竹内好は一九七四年に、日本人のアジア認識には朝鮮が欠落していると指摘する。「(朝鮮は)いちばん近い隣国であって、関係もいちばん密接であったのに、日本人の世界地図からはいまでも欠落している。……これでは正確な自己認識は不可能ではないか。もし「日本の中のアジア」に朝鮮が欠落しているとすれば、その地図は不正確であるから当然に「アジアの中の日本」も不正確になる」(『竹内好全集』⑤、「アジアの中の日本」と。ここでは、朝鮮認識の欠落が日本人の自己認識の欠落に通じていると、二重の意味での欠落が強調されている。朝鮮人の母国語=朝鮮語を抹殺することによって、日本語そのものが歪められたという認識もここに関連する。

ただ、それでも、竹内好における朝鮮像、とくに抵抗する主体としての朝鮮の位置づけは不十分であり、

限界があったといわざるをえない。ここで、さきに述べた水谷仁は自問する。竹内好における〈アジア＝中国〉と〈アジア＝朝鮮〉を比較しておく必要がある。竹内にとって、〈アジア＝中国〉はヨーロッパの侵略に対する抵抗の主体であったが、〈アジア＝朝鮮〉はそのような抵抗の主体と同じものであったのか、あるいは異なったものだったのか、と。そして中国と朝鮮は日本による侵略とそれに対する抵抗をともに経験していたが、しかしそこで、抵抗の主体の範型を魯迅にみた竹内においては、中国型の抵抗の主体像がヨーロッパの侵略に対するアジア一般の抵抗の主体のモデルへと昇華された一方で、朝鮮は抵抗の主体としては明確には対象化されるに至らず、アジアのなかで最も特殊な形で日本の侵略を受けた存在だと見なされたとする。そこに「日本語」という言語の問題がからむが、いずれにしろ、竹内は、自身の朝鮮像のなかに、抵抗の主体像を確固たるものとして見出すことはなかったと述べる。いわば侵略を受けて苦しむ朝鮮人の姿が思い浮かび、そこから学ぶことの必要を力説しはしたが、朝鮮を抵抗の主体のひとつとして十分に対象化するまでには至らなかったというのであり、それが竹内の限界であったと結論づける。そこには当然、朝鮮における抵抗の主体の創出を妨げるような要因となっていたのが他でもない日本であったことを別決し、それを思考の過程に載せるという問題意識が竹内の射程の内にはなかった、言い換えれば、抵抗の主体を創出する可能性を奪うような支配を別決し、それを批判し超克していくような知的な態度が必要ではないかというのである（水谷仁）。

「アジア主義」「方法としてのアジア」

やや難しい議論になったが、この竹内好の弱さないしは限界は、竹内が命題とした「アジア主義」や「方法としてのアジア」と関連し、それは竹内のアジア侵略認識そして天皇制に対する認識と関わってくることになる。もとより敗戦以後、明治維新以来の近代日本をあらためて考察しようとした竹内は、さきに述べた一九四八年の「近代とは何か」（旧題「中国の近代と日本の近代」）で、中国と日本の近代化の違いを明確にして、中国革命の方法を近代日本に投影する「アジア主義」の概念を提出し、独自の近代日本像を打ちたてようとした。そこでは日本に批判的な視点を継承しつつも、日本の近代化を可能とする独自の「伝統」を見出そうとするものであった。姜海守によれば、戦後、竹内が朝鮮を自らの関心の対象とした大きなきっかけは朝鮮戦争ではないかという。分断と戦争の悲劇は日本の朝鮮植民地支配に対する「贖罪感」と日本の「植民地主義」に対する認識をパラレルに深化させていくが、それは日韓の国交交渉の進展ともからんでいた（姜海守）。

竹内好は一九六〇年に国際基督教大学でおこなった講演で、「方法としてのアジア」を提起する。それは一九六三年に脱稿した「アジア主義の展望」に繋がるが、この「アジア主義の展望」は、名著の誉れ高いシリーズ『現代日本思想大系』（筑摩書房）の第九巻「アジア主義」の「解題」である。第九巻は竹内が編集したものであるが、その内容は、岡倉天心、樽井藤吉、宮崎滔天、頭山満、内田良平、大川周明などを扱ったもので、一般に右翼の源流だといわれる玄洋社をアジア主義者と見做すなど、そこにアジア連帯をめざす契機を見つけ出そうとするものであった。ここで「方法としてのアジア」とか「アジア主義」は明確に定義づけられていたわけではない。竹内自身の言葉によれば、「そもそもアジア主義の名称そのものが雑多である。……アジア主義は、膨張主義または侵略主義と完全には重ならない。……ま

たナショナリズム（民族主義、国家主義、国民主義および国粋主義）とも完全には重ならない。むしろ左翼インターナショナリズムとも重ならない。しかし、それらのどれとも重なり合う部分はあるし、とくに膨張主義とは大きく重なる。「たとい定義は困難であるにしても、アジア主義とよぶ以外によぶようなない心的ムード、およびそれに基づいて構想された思想が、日本の近代史を貫いて随所に露出していることは認めないわけにはいかない。……雄飛の思想が国家形成によって膨張主義に転じるのか、それとも膨張主義が国家形成の一要素なのか、その辺のところはむずかしくて私には何ともいえない。しかしともかく、近代国家の形成と膨張主義とは不可分であって、そのこと自体には是非の別はないだろう。……玄洋社＝黒龍会のイデオロギーが最初から侵略的であったかという点、そうではない」（『竹内好全集』⑧、「日本のアジア主義」、原題「アジア主義の展望」）と。そうした延長線上において、竹内は、日本の対外戦争のほとんどは自衛とアジアの安定、アジアの解放のための義戦という大義名分をふりかざすものであったことを認めながら、少なくともそこには、「誤ったにせよ、ともかく主体的に考える姿勢」があり、「アジアは深く日本人の心のうちにあった」と強調する（『竹内好全集』⑤、日本人のアジア観 一九六四年）。これは、近代日本が育んだ「アジア連帯感」まで否定され洗い流されるわけにはいかないという竹内の痛憤であった、とも読みとれる。

どの時代であれ、どんな思想であれ、さまざまな見方があるのはやむを得ない。日本のアジア侵略の時代であっても、竹内が活躍した戦後のある時期であっても、さらにはこの文章を書いている二〇二〇年代であっても、同じである。近代日本に「連帯」と「侵略」の思想が混在していた、そこで「連帯」という「伝統」を大事にすべきだというなら、一九一〇年の「韓国併合」以前から今日に至るまで、朝鮮半島には「親日（ないしは親中その他）」と「反日（あるいは「独立」）の思想が混在してきた。しかしそれでも、朝鮮半島に生きた多くのひとたちにとっては、これまで、一八九五年の「明成皇后弑害事件」（閔妃殺害事件）を許すことはなかっただろう。朝鮮王朝第二十六代国王・高宗の王妃であった閔妃が三浦梧楼らの計画に基づいて王宮に乱入した日本軍守備隊、領事館警察官、民間日本人膨張主義者（大陸浪人）、朝鮮親衛隊、朝鮮訓練隊、朝鮮警務使らによって暗殺された事件である。清、ロシアなどとの思惑がどうであれ、また封建王朝の王妃であったとはいえ、一国の王妃が陵辱され殺害され、朝鮮が「開国」＝植民地化へと向かう路程のことであった。もし明治日本あるいは大正、昭和の天皇ないし皇后が朝鮮人に暗殺されていたとするなら、竹内は「連帯」と「侵略」、あるいは「自衛」その他の理屈でもってどう解釈したのであろうか。「解放後」七五年をへた今日の韓国では、文在寅政権の評価とも絡んで、激しい「左右」の対立がつつき、その核心には「積弊」作業、なかでも親日派清算の「課題」がある。それを歴史的に未解決の課題として捉えるのか、あるいは日本の植民地主義の忘却に通じる「過去の問題」としてごまかすのか、というのはまさに「思想」の問題である。

竹内好が抵抗の主体としてのアジアとか、連帯を強調するには、そこに近代日本の歩みを継承しつつ、何とか日本の未来に繋がる独自の思想的エネルギーというか、時代を超えた普遍性への切り口を見つきたいという内在的な問題意識があったのは確かであろう。しかし、たとえそうであっても、竹内には間違いなく、現代日本のナショナリズムの横行と侵略の歴史の隠蔽につながる思想的弱さないしは限界があったのではないと思われる。言ってみれば、竹内の「アジア主義」言説は、本人が意識していたかどうかは別として、日本近代史の「一国史」的発想に囚われていた。

戦後日本の朝鮮史研究の先頭にたった梶村秀樹は、一九六三年の竹内好の「アジア主義」をめぐる議論に激しい批判を展開していく。『梶村秀樹著作集』第一巻（朝鮮史と日本人）に所収されている、六四年から六五年にかけての「竹内好氏の「アジア主義の展望」の一解釈」、「日本人の朝鮮観」の成立根拠について—「アジア主義」再評価論批判、「現在の「日本ナショナリズム論」について」、そして同巻所収の新納豊「解説」を見れば、その学問的真摯さと激しさがよく分かる。朝鮮史の内在的発展を強調する梶村は、七一年には『排外主義克服のための朝鮮史』を書いているが、そこでは、「アジア主義」は「結論的にいって、表面的に権力に対立しながらも侵略の先兵としての役割を果たした」、「客観的に、あるいはアジア諸国民の眼から見れば、ヨーロッパ列強と同じか、あるいはもっとすさまじいことをやっている日本帝国主義のやり方を、内側からは、ヨーロッパではないアジアの側に立つものと思込んでいる」（梶村秀樹）と述べている。そして梶村は、具体的に、玄洋社に連なる「天佑侠」を名乗る日本人の浪人小集団が、一八九四年の甲午農民戦争（東学党の乱）に際して、東学農民軍を支援したという物語が長らく流布されたが、それは偽りでしかなかったと実証的に論証して、「竹内好氏のような人でさえ事実と認めてその思想を評価した。明治の日本に朝鮮の民衆との連帯の志向が実在した例証というわけだ。だが、「天佑侠」が存在し朝鮮に渡ったことは事実だが、農民軍に参加した事実は全くない」と真っ向から批判している（梶村秀樹、「近代史における朝鮮と日本」）。

梶村秀樹そして少なからぬ在日朝鮮人の研究者が指摘したように、日本ナショナリズムは「日本人の朝鮮観」と切り離しがたく結びついており、むしろ幕末以降、日本ナショナリズムの形成過程自体が、主として「朝鮮観」をめぐる展開されたと言って過言ではない。もとより「竹内の問題提起には、明治以来流布されてきた御用「アジア観」を解体して、日本国民の主体的な「アジア観」をどう再生させるかという、より根本的な提起が含まれていた」が、梶村がそこに踏み込んでの批判を試みたにもかかわらず、十分に意を尽くせなかった」（梶村秀樹、新納豊「解説」）という側面はあろう。しかし時期的にいうなら、梶村の批判は、日韓会談の進行・日本資本の対韓進出の動きと連動した日本ナショナリズム再評価論に警鐘を鳴らす意味をもったものであり、それだけ現実の「日本帝国主義」と対峙しようとしたものだったと評価される。

ちなみに、植民者二世として日本の朝鮮支配の原罪に苦しんだ詩人・作家の森崎和江は、「一行の言葉—竹内好先生をしのんで」という文章で、竹内を「その父性ともいような幅広い感受力」の持主だと深い敬意の念を抱いた。一九六〇年代末ごろのことであろうが、自らの原点で徹底した自己否定によるアイデンティティの模索・再生に呻吟していた森崎にとって、竹内の「アジア主義の展望」の中の一行、「そもそも『侵略』と『連帯』を具体的状況において区別できるかどうかが大問題である」という言葉は、「植民地であった朝鮮で生まれ育った私が、ひそかに先生とお呼びするのは竹内先生ばかりであった」と言わしめるほどの感動的なものであったという。「もうこの一行だけでいい、と思うほどだった」という森崎は竹内に手紙を書き、そして返事をもらい、黒竜倶楽部編『国土内田良平伝』（一九六七年）を贈られたりする（『竹内好全集』⑧、「月報」2、一九八〇年一〇月）。そこには朝鮮侵略、筑豊の炭坑、性の問題、つまり民族・階級・ジェンダーを遮る断層を乗り越え、越境する連帯の思想を渴望していた森崎にとって、日本のくを見直すひとつの転機になったと思われる。もっとも、そうはいつでも、私自身は、森崎が竹内をどう受け入れたのかは別にして、竹内の思想的弱さないし限界をやはり指摘せざるを得な

い。『国士内田良平伝』に関していえば、森崎がどう読みとったとしても、一般には侵略主義を体現した玄洋社・黒龍会の領袖の評伝であることは間違いない。はたしてそれが、近現代日本で救い出すべき「伝統」たりうるのか、どうか。日本の近代化を可能とする独自の「伝統」を見出したいというなら、他のもっと大事なものがありそうだと思うのだが。

ここで改めて言っておきたいのは、私が常日頃、近代日本の思想課題は「天皇制と朝鮮」だと主張してきたことである（尹健次）。近代天皇制が国家システムや支配秩序として厳然と機能したのはいまさら言うまでもないが、日本敗戦後もそれは支配意識として人びとを大きく呪縛した。竹内好も象徴天皇制下にあっても、天皇制的な民族的心性は「一木一草」に遍在し、「皮膚感覚」そのものにまわりついていると慨嘆した。天皇制は政治機構としてあるのではなく、全精神構造として存在することを力説したのであるが、その民族的心性においては、朝鮮が日本人にとってもっとも負性をもつものとして刻印されていた。つまり「天皇制と朝鮮」は表裏の関係にあり、近代日本において精神的・思想的に根幹的な位置を占めてきたのである。「併合」による「皇国臣民」化、三・一運動や関東大震災の際の朝鮮人虐殺、大陸侵略の激化にともなう皇民化政策・教育の強化、朝鮮語抹殺、創氏改名、天皇の名による徴兵・徴用その他、等々、日本ナショナリズムにひそむ天皇制の暴虐性は植民地期朝鮮そして敗戦後の「在日」のあり方にもっとも露骨に表れてきた。しかし、それについての竹内の視線は、あまりに弱々しいものであったと言わざるをえない。

いずれにせよ、竹内好の問題意識をどう理解すればいいのか。中野敏男はこう論じている。主体形成のために「思想的エネルギーを生み出す源泉として、日本人の民族感情に根ざす「伝統」と、日本の近代とは対照的に捉えられるアジア近代の「原理」に期待を寄せ、既存のそれに賭けている。……だが、そのときにそれと引き替えに、もっと大切にすべきもとの思想の根幹を譲ってしまうなら、……それはやはり重大な陥穽にはまったものとみなされるであろう。……それは、竹内が実際にどれほど朝鮮に言及しているかではなく、彼の議論の構造に朝鮮の植民地化問題が欠落しているのではという疑問である」（中野敏男）と。こうした中野の主張を知りつつも、水谷仁はあえて言う。「「アジア主義」からアジア連帯を抉り出していかなければならないという「必然性」が、竹内にはあった。私たちはここに、連帯感の結果が侵略であったことを厳然と認めつつも、そこにアジア連帯の可能性があったことを積極的に捉えていこうとする、竹内のぎりぎりの問題意識とアジアへの責任意識を見出すことができる」、「血で洗われた「アジア主義」から普遍的な価値を見つけていこうとする思想的な態度。この態度こそ、抵抗という竹内の方法によるものなのである」（水谷仁）と。しかし、こうした言い方は、私にはやはり、楽観的にすぎると思わざるをえない。そこに竹内が論じた「主体」「絶望」「抵抗」の意味がきちんと組み込まれているのかどうか。言い換えるなら、そこに、竹内のいう「絶望は抵抗においてあらわれ、抵抗は絶望の行動化としてあらわれる」「抵抗の持続は敗北感の持続である」という根幹的な「思想」が堅持されていたのかどうか、である。竹内好が評論家廃業を思い立ったのは、五五歳のとき、一九六五年の半ば、つまり安保闘争が敗北し、日韓条約が締結された頃だと言われる。

「在日」にとっての絶望、抵抗、敗北感の持続

さて、竹内好は西欧近代との対抗関係のなかで、日本と中国を共有しようとしたが、朝鮮人は直接に西欧近代と交わるのではなく、日本を通じて西欧の近代に接触した。一九一〇年の「韓国併合」以降、日本は宗主国となり、朝鮮は植民地となって、支配／被支配の不幸な歴史を刻んだ。そして一九四五年八月の日本の敗戦は、朝鮮の「解放」を意味した。在日朝鮮人、つまり「在日」は日本の朝鮮植民地支配の所産であり、日本敗戦後、旧宗主国に残留した元「帝国臣民」であり、ときに「外国人」ないしは「定住外国人」と位置づけられるひとつの「民族集団」であり、その子孫であった。そして現在に至るまで「在日」が存在し、語り継がれてきたことからすると、それはひとつの「主体」であり、また日本と朝鮮の構造的関係からして、その「主体」の根底には「絶望」があり、さまざまな「抵抗」があったことが認められる。しかも植民地時代以来の「在日」の抵抗には、少なからず「敗北感の持続」があったものと思われる。

しかし「在日」が絶望し、抵抗し、敗北感を持続させてきたとしても、それは絶対的なものではなく、ときにさまざまに変容し、転倒する、きわめて個別的な様相を見せるものであった。植民地被支配者であり被差別者であった「在日」は、「反日」ないしは「抗日」を基調としながらも、反面、多彩な形で「親日」の様相を示すことも少なくなく、むしろ「反日」／「親日」の二項対立、二分法では捉えられない生の姿を見せてきたと言ってよい。「嫌韓」という言葉があるなら、「嫌日」という言葉があってもおかしくなく、「親日」とややニュアンスの違う「好日」という言葉があってもおかしくない。そこからするとき、「在日」の具体的な生きざまにおいては、「反日」「抗日」「嫌日」「親日」「好日」などといった言葉が複雑に絡み合い、人によってはそうした言葉では表象されえないまた別の日常があったとも思われる。いつの世でも、人と人との関係性は絶えず揺れ動き、時に、あるいはしばしば往還するものである。単なる人と人との関係性だけでなく、配偶者や家族の関係性においても、さらに大きくは国家・祖国や、所属している組織との関係性においても同じである。

竹内好は、魯迅は中国のあり方に絶望したという。絶望だけが、彼にとって真実であり、やがて絶望も真実でなくなった。絶望も虚妄であると。そこから魯迅は文学の道に入っていく。そして「魯迅を他者として、竹内は自分を魯迅に投入した後、再び自分をそこから「取り出した」（孫歌）。しかしそこで、絶望さえもできなかった竹内は、なおも絶望を自己の思想の根底に据えつつ、敗北は抵抗の結果である、抵抗によらない敗北はない、したがって、抵抗の持続は敗北感の持続である、と述べる。しかし私は、魯迅そして魯迅文学の神髄がなにかを語る力はないが、魯迅・魯迅文学を語る竹内が絶望、抵抗、敗北、そして抵抗の持続は敗北感の持続である、とまで言うのには疑念を持たざるをえない。竹内自身、抵抗とは何かについてはよく分からないと言っている。人間はそんなに絶望感にひたり、抵抗の持続は敗北感の持続であるとまで言い切りながら、生きていけるのであろうか。敢えていうなら、私には、神でも仏でもない魯迅が、最後まで敗北感を抱きながら、抵抗の生を歩んだと言えるのかどうかとも怪しく思えてくる。

「在日」は果たしてどうなのか。「在日」にとって、絶望、抵抗、敗北、そして抵抗の持続とは何なのか。「在日」は植民地支配の所産であり、その分、歴史や社会の構造的関係からして、その人生が振幅の度合

いのかかなり激しいものであったことは容易に想像できる。そこから、「在日」が、「日本人」以上に、総体として、苦と楽、絶望と希望、邪と正、闇と光といった二項対立ではなく、その混在の中でもがき続けてきたことは確かである。そうしたことを考えるとき、私は、竹内が口にする「絶望」とか、「抵抗の持続は敗北感の持続である」といった言葉が気になり、むしろその言葉に魅力を感じつつ、改めて「在日」のことを振り返ってみたくなった。もしかしたら、「在日」の歴史、生きざまを絶望とか、抵抗、敗北感の持続といった視点で改めて読み解いていけば、「在日」の総体が何か、もっと分かりやすいものになるのではという期待も生まれてくるのかも知れない。「在日」の過去と現在だけでなく、未来についても……。実際、いまや「在日」という言葉自体、定義も曖昧になりつつあるなかで、絶望、抵抗、敗北感の持続といったことの意味をしっかりと問い続けていけば、「在日」の未来がどんな形のものになりうるのか、ということも思考の範囲に入ってくるのかも知れない。

もっともそうはいつでも、結論めいた何かを、明示的に予見するのは難しいし、そんなものは期待しないほうがいいのかも知れない。日本・南北朝鮮の「三つの国家のはざま」にあって、一世、二世にとって「在日」の共通項は、良かれ悪しかれ、「民族」であり、「祖国」であった。「在日」は何よりも、日本の植民地支配の被害者であり、民族の独立、祖国の統一が夢であり、希望であった。日本人が植民地支配の歴史を忘却するなかで、竹内好が「民族を思考の通路に含まぬ」思想態度を批判したのとはまた別の次元で、「在日」にとって「民族の回路」は避けて通れないものであった。しかもそこには、鶴見俊輔が竹内の思想のあり方について「現実把握の弱さ」があったと評したと同じような陥穽があったとも思われる。しかしそのことは別にしても、日本社会の右傾化が極端に進行していくなか、いまや「在日」の三世も、すでに「民族」「祖国」「在日」の連関から踏みはずれつつあるようでもある。在日文学研究者の磯貝治良は、三世以降の新しい世代は「根生（ねお）いの存在」になりつつあるのではないかと指摘する。つまり彼ら／彼女らは日本社会にしっかりと根をおろした存在だというのである。この「根生い」は日本人への完全な同化を意味するのではなく、あくまで「在日」を生きる存在であるという。「民族アイデンティティ」に安住できず、多様なアイデンティティ（アイデンティティの多様性）を探しあぐねて、苦闘しているのだ、という。「若い世代に歴史意識や民族的素養が欠けているとしても、ルーツを共有する他者の歓びや苦悩に共振できる」存在であるという（『架橋』第二八号、二〇〇九年春）。

私個人でいうなら、紆余曲折を経ながらも人生を歩んできて、いまや「絶望、抵抗、敗北感の持続」の言葉そのままに、いかにして絶望の現実を認めつつ、敗北感を持続させて、抵抗の人生をまっとうさせられるかが一番大事な命題となりつつある。そうになっているという自信はないが、たぶん、そう願っていると言うのが正確なのかも知れない。植民地時代の朝鮮人や在日一世、二世の生きざまについては金石範や金時鐘を初めとする在日朝鮮人文学でさまざまに表象されてきた。反日・抗日・独立・転向・統一、さらに家族そして組織などをめぐる情愛や勇気、希望そして裏切り、苦衷、葛藤、抵抗、絶望等々の様相がさまざまに語られてきた。個別の課題としても、被爆者やBC級戦犯・「従軍慰安婦」・徴用工など、国籍・戸籍ともからむ問題が累積し、苦痛の闇が深く続いたままである。しかしそうした歴史の流れのなかで、在日三世以降では、恐らくまた違った側面で語られる必要があるのだろう。

その点、私はここで、深沢夏衣の『夜の子供』（一九九二年作）のことを思い出す。「帰化者」の悩みを綴り、「在日」そして人間の根幹を問おうとした小説である。世代的には二世であるが、祖国や民族・

政治に組み込まれた時代状況の中でのそれまでの男性作家の作品とは違って、新世代文学への橋渡しの役割をになう。家族や親族の人間関係、日常生活に表れる軋みや葛藤など、アイデンティティの揺れやナショナリティへの違和感が女性のまなざしで描写され、「帰化者」の主体の問題が語られる。一六歳のとき、両親が「帰化」して日本国籍をもつことになったが、生の根源、ルーツを失ったという「在日」としての苦悩が彼女を駆り立てる。そして日々の生活に漂う空虚、絶望、抵抗、敗北の感情が赤裸々に吐露され、それでも居場所のない傍流に自らの存在根拠を見出そうと悩み続ける。それは言うてみれば、「ドレイであることを拒否する」ことを夢見ることだったのかも知れない。

『夜の子供』で、「在日」の雑誌社に勤める女性主人公は、在日朝鮮人というアイデンティティは突きつめていけば、三十八度線の南と北のどちらかに帰属、収斂されていくしかないようだ。在日朝鮮人は南の韓国、北の共和国のどちらかに精神的支えをおくしかないのだろうか、と疑問を呈する。それでも祖国とか民族の言葉に温もりのようなものを感じていた彼女にとって、周囲の人びとの口から発せられる祖国や民族という言葉で、息苦しい場所に追いやられるようになっていく。それらの言葉はそれぞれの立場によってカメレオンのように姿を変え、排撃、糾弾、攻撃の言葉になってしまう。彼らは何を愛し何を欲しているのだろうか。分裂か、それとも抗争か。なぜ祖国が慕わしいのか。自分の足元を覆っているこの暗く厳しい現実こそ、なぜ眼を向けようとしなのだろうか。自分達よりも大切なもの、それが祖国であり、民族なのか。それが思想とか政治とかいうものなのか。もっと自由に心穏やかに、そしてひとを愛して生きたい。しかし、ひとはこの私を認めてくれないだろう。なぜなら私は「帰化者」だから……。

私は竹内好の思想を学ぶことによって、近代の自己形成史における主体の重要性を知り、そこにおける絶望とか、抵抗、敗北感の持続の大切さをいちおうは知ったつもりである。しかし実際問題として、それらによって、「在日」の過去と現在を理解することができるのであろうか。世界にはいまや移民・難民があふれかえり、「在日」の存在そのものが「普遍性」を帯びつつある。そうした世界の不透明さの中で、「在日」の未来のありようをどう予見することができるのであろうか……。

【引用・参考文献】

『竹内好全集』全一七巻、筑摩書房、一九八〇—八二年。

松本健一『竹内好論—革命と沈黙』第三文明社、一九七五年。

菅孝行『竹内好論—亜細亜への反歌』三一書房、一九七六年。

梶村秀樹『梶村秀樹著作集』第一巻、朝鮮史と日本人、明石書店、一九九二年。

深沢夏衣『夜の子供』講談社、一九九二年。

孫歌『竹内好という問い』岩波書店、二〇〇五年。

尹健次『思想体験の交錯—日本・韓国・在日—一九四五年以後』岩波書店、二〇〇八年。

黒川みどり・山田智『評伝 竹内好』有志舎、二〇二〇年。

平石直昭「竹内好における歴史像の転回—大東亜・魯迅・アジア」（『思想』二〇〇六年一〇月号）。

加藤周一「竹内好の批評装置」（『現代思想』二〇〇九年七月、臨時増刊号）。

水谷仁「もうひとつのアジア—竹内好の朝鮮像」（『Nagoya University Asian Law Bulletin』No.2、二〇一六年九月）。

中野敏男「『戦後日本』に抗する戦後思想」（権赫泰・車承棋編『〈戦後〉の誕生—戦後日本と「朝鮮」の境界』新泉社、二〇一七年）。

姜海守「〈朝鮮〉というトポスからみた「方法としてのアジア」」（黒川みどり・山田智編『竹内好とその時代』有志舎、二〇一八年）。

